

11月27日(金)



しずおか市町対抗駅伝・三島市選手団壮行会
 <<市民体育館>>

「第 21 回しずおか市町対抗駅伝」に出場する三島市選手団の壮行会が行われました。江島主将は「コロナ禍で大会がなく練習のみだったが、前年を超えるタイムを出して報告したいです。」と抱負を述べました。

11月13日(金)



白滝公園へ大型遊具寄贈
 <<三島市役所>>

創業 70 周年を迎える市内谷田の中林建設株式会社様から、白滝公園に大型遊具を寄贈していただくこととなりました。既存遊具の撤去および寄贈遊具の設置工事は順次着手し、来年 3 月ごろに完成式を予定しています。

12月2日(水)



みしま茶粉末スティックが贈られました
 <<錦田こども園>>

市内の私立・公立幼稚園・保育所など 33 園の年少・年中・年長児に、三島の茶農家が作った粉末茶が配布されました。コロナ禍により出荷が減少した茶農家支援の一環として国の交付金を活用し市が実施したもので、インフルエンザなどの予防効果も期待されます。

11月28日(土)



増田明美さんによる健康づくり講演会
 <<市民文化会館>>

「私という人生の長距離ランナー」と題して講演が行われ、増田さんは、「家庭でのお風呂掃除や徒歩での移動など、日常の何気ない動作が健康につながります。」と日々の生活で体を活発に動かすことの重要性を話されました。

市公式 Facebook ページでお届けしている記事から、話題のものを掲載しています。



歴史の小箱

No.392

地域の歴史
壱町田

今回は、沢地川が大場川に注ぐ地域に位置する壱町田について紹介します。

江戸時代の壱町田は伊豆国君沢郡内の村の一つであり、三嶋大社の神領でした。江戸時代の地誌『豆州志稿』によると、この地は元来、沢地村に属していましたが、慶長九年（一六〇四）十二月に沢地村から一町歩の田地を分割して三嶋大社の神領となり、壱町田という地名が付けられたといえます。

明治二十四年（一八九一）には戸数二十軒、人口一四八人として記録されています。かつては「壱町田十七軒百姓」といわれ、戸数は近世から大正にかけて二十軒前後でした。

壱町田の農民は沢地川の水を利用して水田を切り開いていき、沢地川両岸には豊かな水田地帯が広がっていました。しかし水田面積は少なく、長く畑の

開墾に努めました。千枚原、光ヶ丘一带は明治と昭和初期に畑となり、主として野菜・桑、後には甘藷（さつま芋）が栽培されていました。

そんな田園風景が広がっていた壱町田は昭和三十年代の千枚原団地の開発に始まり、急速に進んだ都市化によって住宅の建ち並ぶ宅地へと変化しています。



▲八幡神社からみた壱町田 (1987年撮影)

さて、壱町田の田畑は沢地川から引き入れた農業用水に支えられ、いたるところに用水路が設けられていました。これらの用水のなかにトンネルを通り祇園原（加茂川町）まで続く「祇園原用水」と呼ばれる用水があります。この用水は安政二年（一八五五）三嶋大社宮司の矢田部盛治が神領地であった祇園原一带の畑地を水田化する計画をたて、造られたものです。

当初造られた水路は杉丸太の芯をくり抜き、接ぎ合わせた一八八メートルもの木樋であった

たと言われています。さらに慶応四年（明治元年、一八六八）、盛治は壱町田の農民に祇園山腹を抜ける祇園原隧道を掘らせました。当時の名主望月清一ほか壱町田の農民は苦勞の末、緻密な調査のうえに行われたこの大工事をわずか四カ月で完遂させました。矢田部家も望月家もこの工事のため、相当な借金を負ったと伝えられています。

現在残っている水路はコンクリート造りの洗堰で、沢地川左岸で取水し、所々の暗渠を通り、その先約二五〇メートルのトンネルで祇園原へ抜けています。近隣の人の話によると、現在は使われていないようですが、昔はその水路やトンネルは子どもたちのあそび場で、よくザリガニやカエルを捕まえて遊んでいたそうです。トンネルには入れませんが、草に覆われ見つけづらくなっている水路を探してみたいかがでしょうか。



▲現在の祇園原用水の水路

わたしの

ひいおばあちゃんおばあちゃん

当番 おの あかり さん

私のひいおばあちゃんは、九十四歳だけど、今でも畑に出て畑仕事をしています。まだまだ元気なので、すごいと思います。そして、とても家族思いです。ひいおじいちゃんのお葬式でも一番泣いて悲しんでいました。

おばあちゃんはとてもパワフルです。いろいろな習い事をしていたり、低木の剪定をしていたり、すごく元気です。

二人とも尊敬しているので、これからもずっと元気であってほしいです。



小野 亜香里 (6年) 香子 (74歳)